

漢詩（近体詩）のルール

岡本祐幸

平仄（ひょうそく）説明

漢字を唐や宋の時代の中国語で発音したとき、なだらかな音に聞こえる字を「平字（ひょうじ）」、そうでないのを「仄字（そくじ）」という。原則的に、現代中国語の「四声」の「一」と「二」が「平」で、「三」と「四」が「仄」。例外は、日本漢字音で発音してみて（歴史的仮名遣いで表記して）、「フ・ツ・チ・ク・キ」のどれかで終わる字。たとえば、蝶（テフ）、列（レツ）、八（ハチ）、六（ロク）、席（セキ）など。これらの語尾は、現代中国語では消えてしまっているので、誤って、「平字」と分類されてしまいそうだが、正しくは、「仄字」。

韻目（韻字）説明

百六種類存在する（「平水韻」の場合）。そのうち、脚韻に使う「平字」は、「上平」と「下平」それぞれ十五種類で、合計三十種類。たとえば、「上平」には、「東（トウ）」、「冬（トウ）」、「江（カウ）」、「佳（カ）」、「齊（セイ）」などが、また、「下平」には、「肴（カウ）」、「歌（カ）」、「青（セイ）」などが代表の字である。

韻を踏むときは、韻目（韻字）を一致させる必要がある。すなわち、脚韻には、同じ韻のグループ（韻目）に属する字を使わなければならない。

平仄や韻目は、漢和辞典で調べることができる。見出しの漢字の下に四角に囲まれた字が書かれているが、それが、平仄と韻目を表す。例えば、「平字」は四角の左下スミに斜めに線がある（三角形は塗りつぶされていない）。また、「仄字」は四角の左上、右上、または右下のスミに斜めの線（三角形を黒く塗りつぶしてある）がある。そして、四角の中には、韻目を代表する漢字が入れている。

記号説明（一部、この文章独自の記号●を採用）

* ○ 平字

* ● 仄字

* ◎ (平) 韻字

* ● 平・仄どちらでもよい字

* → ←

●○○●

第一字と第三字は平・仄どちらでもよいが、両方とも仄字にしてはいけないことを右横の矢印であらわす（弧平を避けるため）。すなわち、●○○●は避ける。すると、次の三つの場合が許される。○○○、○○●、●○○。

近体詩の種類

* 絶句 四句のもの

* 律詩 八句のもの

* 排律 十句以上のもの（普通は二十句〜百二十句ぐらいが多い）

これら三種類にそれぞれ、一句が五言ずつと七言ずつの二つの場合がある。

参考文献

* 進藤虚籟「書のための漢詩手帖」（木耳社、1987年）25〜87ページ。

* 一海知義「岩波ジュニア新書304 漢詩入門」（岩波書店、1998年）167〜210ページ。

* 村上哲見「唐詩」講談社学術文庫（講談社、1998年）303〜352ページ。

* 「漢和大字典」（学研、1978年）1647〜1658ページ。

漢詩のきまり

*句法（音数律）

五言句は「上二下三」の構造。すなわち、二音節と三音節の組み合わせで一句を成す。また、七言句は「上四（二・二）下三」の構造。

*声律（平仄律）

・押韻の平仄

普通、偶数句の最終字を同じ韻目の平字とする（押韻）。そして、途中で韻の種類を変えない（「一韻到底」）。ただし、七言詩では、更に第一句の最終字（第七字）も押韻する場合が多い。また、韻を踏まない句の末尾は仄字とする。

・「二四不同二六対」

それぞれの句において、第二字と第四字の平仄が同じであってはならない。そして、第二字と第六字の平仄は同じでなくてはならない。

・「下三連禁」（「三平」、**「三仄」**ともよぶ）

それぞれの句において、平字が三字（○○○）で終わったり、仄字が三字（●●●）で終わってはいけない。

・「孤平」

それぞれの句において、仄字で平字を挟んではいけない。すなわち、「仄平仄」（●○○）は許されない。

・二句一組（聯）の平仄

近体詩では、二句をひと組にして「聯（れん）」といい、基本単位とする。

一句目の第二字、第四字、第六字の平仄は、二句目の第二字、第四字、第六字の平仄とそれぞれ逆になっていなければならない。勿論、「二四不同二六対」のルールを守りながらである。

よって、次の可能性がある。

五言平起

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

七言平起

□ ○ ○ □ □ □ □
● ○ ○ □ □ □ □

五言仄起

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

七言仄起

□ ○ ○ □ □ □ □
● ○ ○ □ □ □ □

ここで、「平起（ひようおこり）」と「仄起（そくおこり）」とは、二句一組（聯）のうち、第一句の第二字がそれぞれ平字（○）と仄字（●）である場合を言う。また、□は他のルールを守る限り、平仄はどちらでも良い。

次の二句一組（聯）以降への続け方は、平起または仄起を繰り返してはならない（すなわち、平起と仄起を交互に繰り返す）。つまり、

一組目（一聯目、首聯）

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

二組目（二聯目）

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

三組目（三聯目）

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

四組目（四聯目）

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

□ ○ ○ □ □
● ○ ○ □ □

五組目（五聯目）

□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □
● ○ ○ □ □ □	● ○ ○ □ □ □	● ○ ○ □ □ □	● ○ ○ □ □ □
□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □
□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □	□ ○ ○ □ □ □

というようなように続いていく。

*その他

- ・一字不重用（二字重ねては用いず）

一首の詩の中で、同じ字を二度使ってはいけない。ただし、「蕭々」とか「滾々」といった重ね字は例外。

- ・冒韻

ひとつの詩の中では、韻に使った字や、その韻のグループ（韻目）に属する字は能う限り避ける。特に、同じ韻に属する字を、各句の第一字目に置くことは避ける。

- ・対句

二句をひと組にして「聯（れん）」といい、最初の聯を「首聯（しゅれん）」（あるいは起聯（きれん））、最後の聯を「尾聯（びれん）」というが、近体詩では、**首聯と尾聯以外の聯は、全て対句にしなけれ**ばならない。ここで、対句とは、一組の二句が文法的構造を同じくし、内容的にも、いろいろな対応関係（意味の上で対立したり、共通したり）をもつものをいう。ちなみに、絶句には首聯と尾聯しかないの、対句にする必要はない。また、律詩の場合、二聯目と三聯目をそれぞれ「領聯（がんれん）」と「頸聯（けいれん）」と呼ぶが、これらをそれぞれ対句にしなればならない。

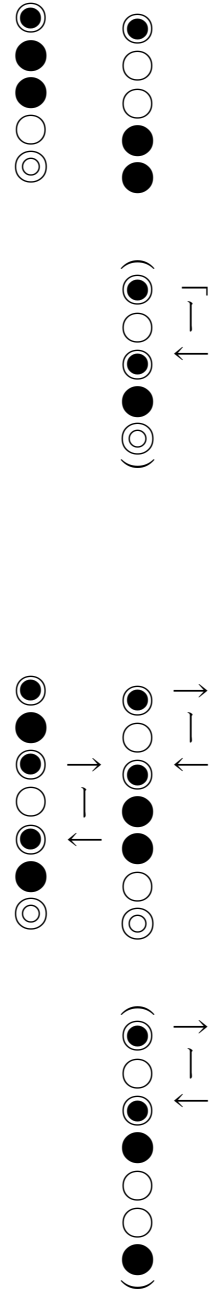
- ・起承転結

絶句（四句の近体詩）独特の約束事。絶句の四句は、（意味の上で）いわゆる「起承転結」になっ

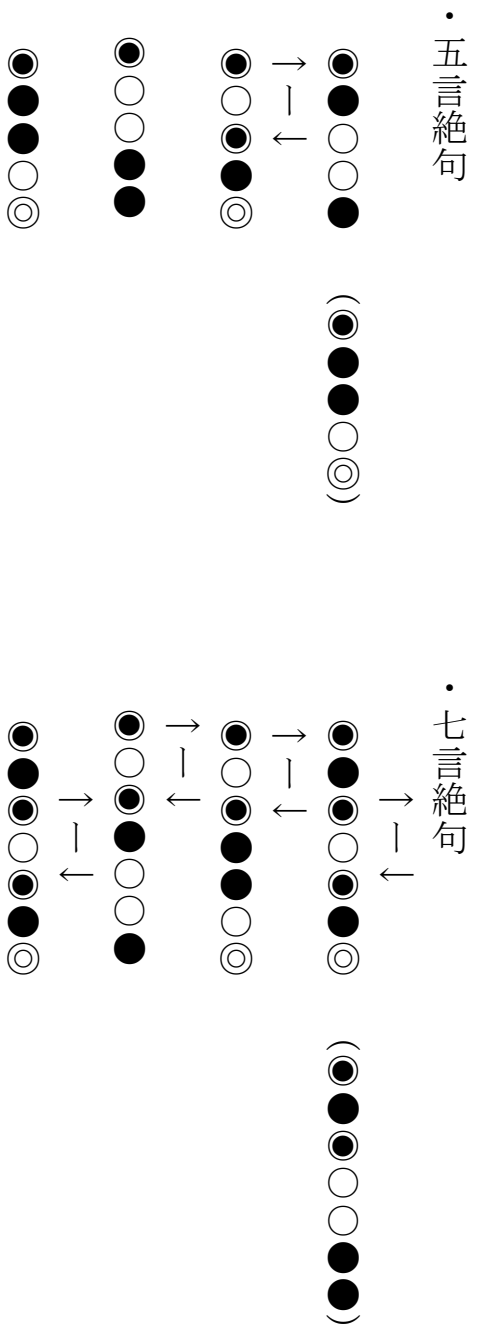
平仄式一覧表

* 絶句（五絶では第一句末に押韻しないのを、七絶では第一句末に押韻するのをそれぞれ正格とする）

一 平起式



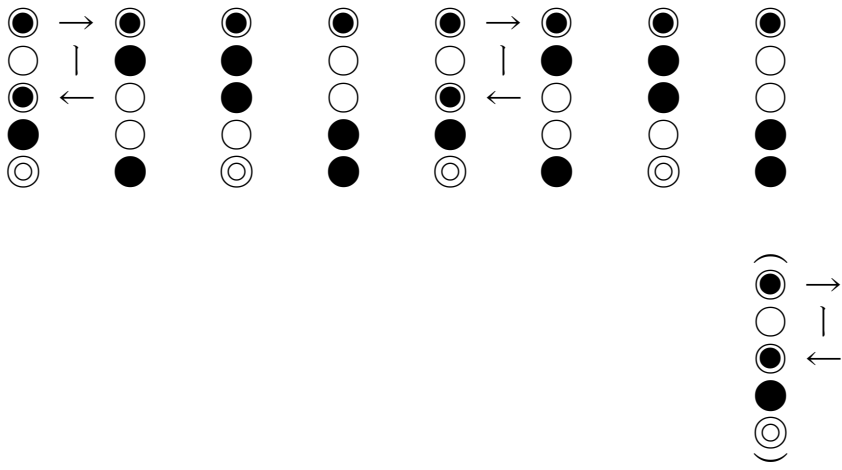
二 仄起式



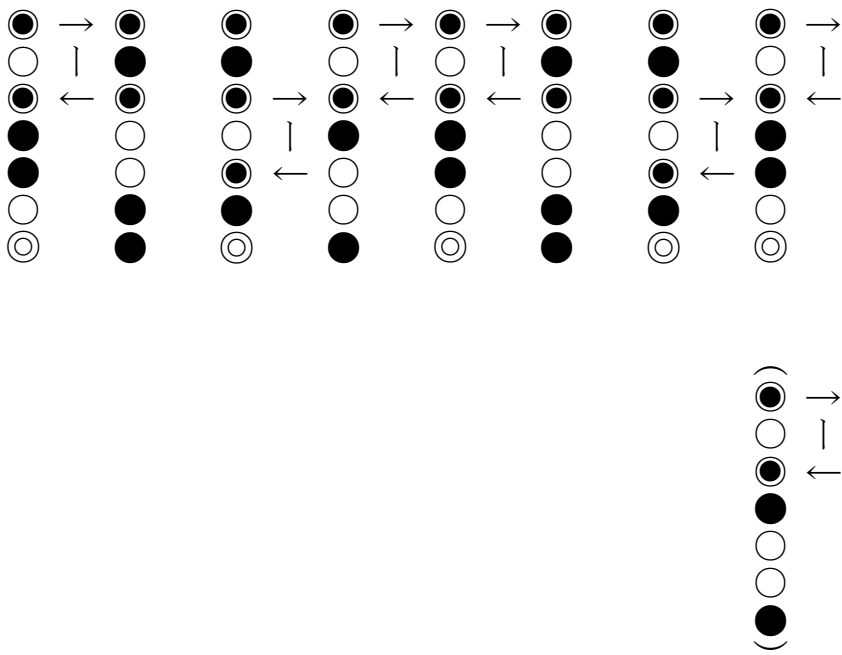
* 律詩（第一句の押韻の場合を除き、絶句の平仄の繰り返し）
 （五律では仄起を、七律では平起を正格とする）（五律では第一句末の押韻は少ない）

一 平起式

・五言律詩

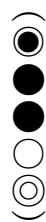
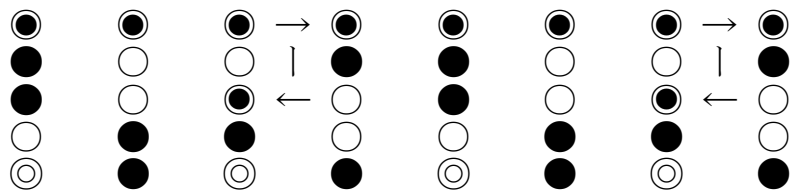


・七言律詩



二 仄起式

• 五言律詩



• 七言律詩

